

## 菊池寛と一九二〇年代の神戸

一九二〇年代前半の「大阪朝日新聞 神戸附録」を資料として

箕野 聡子

### 1. はじめに

「大阪朝日新聞 神戸附録」とは、「大阪朝日新聞」の地方版である。一九二五年四月一日からは、「神戸附録」は「神戸版」と名が改められた。この紙面には神戸、阪神地方の情報が載せられ、記者が読者を巻き込みながら、地域の活性化を図った形跡が見られる。

例えば、菊池寛に関する項目を調べていくと、一九二六年には、神戸での映画上映についての多くの記述が見つかる。一九二五年八月に毎日新聞社を退社した菊池が、「東京朝日新聞」・「大阪朝日新聞」両紙に、一九二五年七月三〇日から十一月四日まで連載した小説「第二の接吻」が、連合映画芸術家協会<sup>1</sup>と日活と松竹<sup>2</sup>の三社によって異なる監督、異なる俳優により映画化され、神戸でも上映されたからである。

連日の好評の様子を伝えた紙面では、「第二の接吻」の上映に際し、読者優待を配布したことを伝える記事も見つかる<sup>3</sup>。朝日新聞神戸販売

局は、自紙連載小説の映画化上映時には、常に神戸の上映館と交渉して読者に優待券を配布し、読者を動かす戦法をとっていった。

また、日活大將軍が「慈悲心鳥」（原作は、「母之友」一九二一年五月～一九二二年六月）の映画化に取り組んだ折には、朝日新聞社発行「アサヒグラフ」の記念行事、「アサヒ・グラフ・デー」内で、日活スター数十名出演の「慈悲心鳥」ロケ見学の告知を行った。五月二日の「神戸版」には、出演する夏川静江と澤らん子の写真が大きく報じられ、西宮の甲陽園で開催されるこの行事に、読者の参加を促す呼びかけが行われた<sup>4</sup>。（資料1）



（資料1）夏川静江（右）と澤らん子（左）

<sup>1</sup>「第二の接吻」は、二葉館、錦座、菊水館の三館で上映された。最も早かったのが、二葉館での上映で一九二六年二月二日～六日である。製作した連合映画芸術家協会は、一九二五年に直木三十五が奈良に創設したもので、文芸部には菊池がいた。

<sup>2</sup> 日活大將軍作品は錦座で、松竹蒲田作品は菊水館で、一九二六年四月二九日～五月五日（四月二二日封切）に同時上映された。

<sup>3</sup> 連合映画芸術家協会作品上映時には、「『第二の接吻』と読者優待」と題した記事内で、「読者日ごろの愛顧に報ゆるため同館の各等半額券」（二月八日）を配布したことを伝えた。

日活大將軍と松竹蒲田との上映時には、「本紙『第二の接吻』改題 京子と倭子 = 日活と松竹で同時に封切（四月三〇日）の記事で「競映だけに両社とも大変な力の入れ方である」と両作品の比較研究を勧め、両館の各等半額券を

「二十九日朝の本紙に折込みの上一般へ配布した」ことを報告した。

<sup>4</sup> 一九二七年五月二三日の「大阪朝日新聞 神戸版」には、前日のこの催しの様子が詳しく伝えられた。大阪神戸から押し寄せた入場者は、五万人と推定され、その八分通りが婦人と子どもで、日活男女優に対して「ファン連が叫ぶ声が山間にこだまして入場口は動きのとれぬ状態であつた」という。ロケを見た観衆が「なるほどあなしてこしらへまんのか」と感心していたとのレポートも載せられ、「慈悲心鳥」は新聞読者参加の中でも製作された映画となった。

一九二〇年代の神戸、特に新開地には、飲食店や百貨店、劇場とともに、映画館がひしめき合って立ち並んでいた<sup>5</sup>。その各館の興行内容が「大阪朝日新聞 神戸附録」（以下、「神戸附録」とのみ記す）や「大阪朝日新聞 神戸版」の紙面に毎日紹介されたのである。

神戸は一八六八年の開港以来、流入してきた西洋文化を様々な形で取り入れ、外国人居留地および雑居地を中心に異文化との共生を果たしてきた。神戸モダニズム・阪神間モダニズムと呼ばれたこの独自の文化の研究は、早くから進んできたといえる。しかし、神戸はそれと共に、海港都市として、川崎造船所や三菱造船所を擁する重工業の担い手である労働者やその家族の生活の場としても発展していたのである。彼らへの娯楽提供にも熱心であった神戸は、劇場や映画館の情報を地方版で細かく住民たちに伝えている。

ここでは、後に初代大映社長に就任して日本の映画界を牽引し、文学を大衆に供給することに熱心であった菊池寛に注目する。彼の作品の内、一九二〇年前半の神戸での劇場上演作品を主に調査する。その中で、地方版という新聞メディアが、地域と文学との相互発展にどのような役割を果たしていくかを考察したい。

## 2. 玩辞楼十二曲としての「藤十郎の恋」

玩辞楼十二曲とは、上方歌舞伎役者初代中村鴈治郎が選んだ成駒屋のお家芸の事である。菊池寛の「藤十郎の恋」は、「河庄」や「時雨の炬燵」、「封印切」とともにこれに選ばれた。

元禄の名優、初代坂田藤十郎をモデルに描かれた「藤十郎の恋」は、小説が「大阪毎日新聞」<sup>6</sup>に連載されてから、わずか半年後に、大森痴雪が脚色し、初代中村鴈治郎が浪花座において上

<sup>5</sup> 新開地には、劇場でもある聚楽館をはじめ、主に洋画を上演する第一朝日館とキネマ倶楽部、さらに二葉館（マキノ系）、錦座（日活系）、菊水館（松竹系）、有楽館などがあつた。

<sup>6</sup> 一九一九年四月三日～一三日にかけて、「大阪毎日新聞」夕刊に連載された。



（資料2）「神戸附録」（一九二四年二月九日）

演して好評を得る。藤十郎が新しい演目工夫のために、茶屋の女房に偽りの恋を仕掛ける場面では、官憲から風紀紊乱罪の適応に値すると指摘されたが、それでも鴈治郎は演技を変えなかったという逸話を残す作品である。

この「藤十郎の恋」が一九二四年、神戸で初めて上演された。上演場所は新開地の松竹劇場である。（資料2）

松竹は、一九二三年一月に神戸の中央劇場を焼失させている。その後でできたのが松竹劇場で、一九二四年一月に竣工記念興行をしたばかりであった。外国人の観客を強く意識した新しい劇場で、お茶屋制度と栈敷席が歌舞伎劇場の通例であるにもかかわらず、和洋食の食堂を設置し、「二階観覧席は内外人とも御意に適ふ単独椅子席に、其他当代文化の粋を集めたる神戸に最も応しき新劇場」<sup>7</sup>として開館した。

<sup>7</sup> 松竹劇場広告（「神戸附録」一九二三年二月二八日）

二月公演を「東西大歌舞伎」と銘打ったのは、上方の中村鴈治郎一座に、関東で活躍する七代目松本幸四郎を迎えたからである。「神戸附録」は、「鴈治郎と幸四郎来る」（二月七日）との見出しで、「正月興行以来大ものを打続けてみた新開地松竹劇場に来る十日から又もや成駒屋、高麗屋の合同大一座が来る、初春からこの三日まで大阪中座に打越した例の勧進帳が呼物になってゐる外神戸では初めての『藤十郎の恋』も出る」とこの興行に注目した。また、「舞台端から——鴈幸顔合せの——松竹劇場」（二月一四日）では、「『勧進帳』も『やれ三味線』も『山科閑居』も『藤十郎の恋』も大阪では散々ばら演つくされ今更褒めるだけが野暮だが神戸では全く珍しい」と、神戸での上演を喜んだ。

公演は好評で、松竹劇場は新聞広告に「果然割るゝが如き人気を集めて初日二日目三日目四日目と連日開幕前既に各等売切満員の段あつく御礼申上候」<sup>8</sup>と出した。

配役は、坂田藤十郎が中村鴈治郎、お梶が中村福助、都万太夫座の若太夫が松本幸四郎である<sup>9</sup>。「演芸たより」は、「期待に反せず沸き返る盛況を見た就中勧進帳と藤十郎の恋が呼物である」<sup>10</sup>とその好評を伝えた。

しかし神戸での「藤十郎の恋」の上演にあたって脚本検閲上問題があったことも、「神戸附録」は伝えている。初日前日の二月九日に掲載された「『藤十郎の恋』やつと許さる 台詞と一言附加えて」の記事である。「劇場主任及び座付作者を招き種々の交渉を重ねた」結果、「当局では先に問題を起した富山県のやうな無理解を云ふのではないが『藤十郎の恋』にある姦通的の場面は現在の観客の大部分たる俗衆に誤解さるゝ虞れがあるからと主張し、結局藤十郎の芸の為に恋を挑まれた女——お梶がその当時独

身であつたといふことを証明する台詞を一言挿入して上演は円満に許可さるゝことに決定した」ということだ。変更を求められたのが、お梶を独身とするという部分のみであったことは、国際都市としての発展を願う当時の神戸の倫理観を示すところであるのかもしれない。

神戸は、関東大震災以後多くの外国人観光客を受け入れるようになっていた。一九二三年一月二〇日の「神戸附録」の記事には、「大観光団を迎へる神戸」の見出しで「歳末から来春にかけて世界周遊の米国観光団が」「ざっと二千五百名ばかり」「続々来朝する」予定が書かれている。これらの観光客を迎える神戸は、検閲においても他の都市とは違う結果を出したことが、地方版の新聞紙面から読み取れる。

さらに、地方版には、地域読者の反応も興味深く記される。一九二四年三月二二日の「神戸附録」には、神戸女学院の生徒が行う文芸会で坂田藤十郎を題材にした劇が演じられたことが大きく取り上げられた。「成駒屋そこ退け 大芝居で大向ふを唸らす 女学院の『藤十郎の恋』」という見出しがついたこの記事では、高等学校三年生が「鴈治郎一座そのけの芸を見せて見物をヤンヤと云はせてゐた」として、演じる生徒も見物も鴈治郎一座の公演をよく知っての盛り上がりをもせたことを記している。

### 3. 新劇運動としての「恩讐の彼方に」・「忠直卿行状記」

「藤十郎の恋」が、新作歌舞伎の演目の代表作として定着していく中、神戸ではそれより少し前から、歌舞伎とは違う新しい演劇活動が盛んになっていた。中でも、名古屋にいて関東大震災の難を逃れた守田勘彌は、神戸でいち早く活動を再開して人気を集めた。守田勘彌の文芸座は、一九二三年一月五日、新開地の聚楽館において、神戸又新日報主催文芸座講演会を行い「神戸が文芸座旗揚げの地」<sup>11</sup>だと述べ、「恩

<sup>8</sup> 松竹劇場広告（「神戸附録」一九二四年二月一四日）

<sup>9</sup> 松竹劇場は、配役が載った広告を「神戸附録」（一九二四年二月一二日）に出している。

<sup>10</sup> 「演芸たより」（「神戸附録」一九二四年二月一日）

<sup>11</sup> 「文芸座の講演」（「神戸附録」一九二三年一月七日）

讐の彼方に」<sup>12</sup>その他一座上演の脚本の説明を行った。六日の初日には、菊池寛の「忠直卿行状記」<sup>13</sup>三幕の他三演目をかけ、一二日からの二の替りで菊池寛の「恩讐の彼方に」三幕の他三演目をかけている。一座には帝劇第一期女優の初瀬浪子、藤間房子がいた。「勘彌の芸術座聚楽館の霜月興行」<sup>14</sup>の記事では、「役者は無人だが忠直卿行状記でも油地獄でも変なセンチメントや臭い技巧がなく、劇芸術の上からゆくと確かに正道を歩んでいるやうだ、日本の歌舞伎、劇壇が今後さういふ道筋に進まなければならないかと疑問に対し正しい暗示を与えてゐるのだ」と、日本の劇界の変動を示唆した意見が載せられた。

「演芸たより」<sup>15</sup>では、「聚楽館文芸座第一の『忠直卿行状記』は勘彌の出世作として今回が第三回目で舞台にいよいよ円熟した冴えを見せてゐる」と好評の様子が記された。また、「文芸座二の替りを見た感想」<sup>16</sup>でも「恩讐の彼方に」は、「勘彌の了海に、その表現の随所に我等の賛美の理由は沢山に見出される」と称賛されたのである。

ここで守田勘彌は、「関西各地の観客が案外新しい芝居に理解があること、といふよりは古い陳套な歌舞伎に愛想をつかして居られる程度のヒドいことには驚きました。眠れる劇界に取ってこれは地震以上の驚きでせう」<sup>17</sup>と当時の歌舞伎界の古い体制を批判し、新しい演劇活動への意欲を語った。

守田勘彌が神戸を特別に感じるの、このような発言を受け入れる環境が神戸にあったからであろう。「神戸附録」はその紙面作りにおいて、神戸の観客の意識作りにも大きな影響を与えているといえるだろう。

神戸において、菊池寛の作品は、歌舞伎の新しい表現手段としても演じられ、また歌舞伎を越えようとした新劇運動の表現手段としても演じられた。歌舞伎を愛しながらも、当代の価値観に沿った近代日本の演劇を作り上げようとした菊池寛の努力が実を結んだ結果といえよう。

さらに、アイルランド演劇の影響を受けた菊池寛の戯曲作品は、今度は翻訳物に取り組み演者にも注目される。そしてやはり海外演劇をいち早く積極的に取り入れた関西の劇場でも上演されるのである。

### 3. 宝塚劇場で上演された「屋上の狂人」

一九二五年八月一日から一四日まで、宝塚中劇場（一九二三年完成）で「屋上の狂人」<sup>18</sup>が上演された。二代目市川猿之助主宰の春秋座による宝塚公演である。（資料3）



（資料3）「神戸附録」

（一九二五年八月一日）

<sup>12</sup> 原作初出は、「中央公論」（一九一九年一月）である。

<sup>13</sup> 原作初出は、「中央公論」（一九一八年九月）である。

<sup>14</sup> 「勘彌の芸術座 聚楽館の霜月興行」（「神戸附録」一九二三年一月八日）

<sup>15</sup> 「演芸たより」（「神戸附録」一九二三年一月八日）

<sup>16</sup> 「文芸座二の替りを見た感想」（「神戸附録」一九二三年一月十四日）

<sup>17</sup> 「太る文芸座」（「神戸附録」一九二三年一月一二日）

<sup>18</sup> 原作初出は、「新思潮」（一九一六年五月）である。

阪神急行電鉄（阪急）による新聞公告は、阪急電車を模した白枠が描かれた。春秋座公演の左隣には、大劇場（一九二四年完成）で上演される宝塚少女歌劇の広告が置かれた。宝塚劇場が歌舞伎やその他の演劇の上演を積極的に行ったのは、一九二三年の関東大震災以後である。

震災の自粛ムードが解けた一九二三年一月には、東京の歌舞伎役者たちが関西での興行企画を具体化していったのであるが、六代目尾上菊五郎が「来春二月から宝塚歌劇場」<sup>19</sup>で公演を行うことを発表してから、宝塚劇場は関東の演者を受け入れる場所としても機能していった。一九二四年に大劇場が完成すると少女歌劇の公演は新劇場に移り、それまで使用していた中劇場は本格的に他公演を受け入れていくことになる。

春秋座は、猿之助が欧米留学の経験を活かして新作や翻訳物に取り組むために立ち上げた一座である。一九二五年八月二日の「演芸たより」には、「宝塚の猿之助一座 一日初日で『屋上の狂人』一幕『悪太郎』一幕『小英雄』一幕『縮屋新助』三幕六場を出した」を出したという記述もある。

この「屋上の狂人」初日公演を、菊池寛は宝塚劇場で観ている。随筆「『阪神見聞録』附録」（「文藝春秋」一九二五年十一月）には、「大阪にいた私は、その日宝塚へ猿之助の『屋上の狂人』を見に行った。梅田から電車に乗る」と、その時の様子が詳しく記された。

菊池寛はここで阪急電車内での出来事も記してゆくのであるが、特に興味深いのは、電車の乗客について、谷崎潤一郎の『阪神見聞録』と比べて記述していく箇所である。

『文藝春秋』（十四年十一月）に載せた谷崎潤一郎氏の『阪神見聞録』は、創刊号以来反響の多かった文章の一つだった。阪神方面から憤慨して来る人、同感して来る

人、相半したと云つてもよい。だが、あの文章を読んで私も苦笑した一人である。と云うのは、私もつい今年八月一日に、あの電車の中で、人から夕刊を借りたからである。

谷崎潤一郎は「阪神見聞録」において、阪急神戸線に乗った際の印象も記しているが、「人から夕刊」を借りる話は、次のように書かれる。

大阪の人——それも相当教養のあるらしいサラリーメン階級の人々——は、電車の中で見知らぬ人の新聞を借りて読むことを、少しも不作法とは考へてみないやうである。（略）たとへば私が大朝と大毎の夕刊を買って乗り込むとすると、執方か一つ、私の手に取らない方の新聞を、ちゃんと眼をつけて直ぐに借りにくる。

「屋上の狂人」を観た後、菊池寛は帰りの電車の中で、横に座った小僧さんの膝の上にある『毎日』と『朝日』との夕刊を借りる。「芝居のはねたのは、十一時半」<sup>20</sup>。「うつらうつらと居ねむりしている」「十五六の小僧さん」の「肩をつゝいて目をさませ、夕刊をかりた」。菊池寛は、「どことなく気楽で、私のような旅行者でもつい、夕刊を借りたくなる」関西の印象を語るのである。

この二つの見聞録から伺えるのは、関西において新聞が庶民の娯楽として根付いていることである。この習慣は、何も関西に限った事ではないが、関西の広い読者層のことは菊池の意識にあったに違いない。神戸も舞台の一つとなった「明眸禍」（「婦女界」一九二八年一月～一九二九年一〇月）において、ヒロイン珠子が「大阪朝日の神戸版」を見る場面が設定されたのは、菊池が、関西でこの紙面を読む機会を持ってい

<sup>19</sup> 「神戸附録」（一九二三年一月一〇日）には「宝塚歌劇場に立籠もり 菊五郎は隔月出演歌劇は奇数月に興行する」と書かれている。

<sup>20</sup> 「演芸たより」（「神戸附録」一九二五年八月六日）には、「公演時間は『屋上の狂人』（後五時より三十分まで）『悪太郎』（同五十五分より六時四十分まで）『小英雄』（同五十五分より七時十分まで）『縮屋新助』（七時二十五分より九時四十五分まで）」とあり、菊池寛の記述とは、少し異なる。

たこと、また、関西の人々がこの紙面に馴染んでいたのを知っていたことを示してくれる。

#### 4. 終わりに

以上、一九二〇年代前半の神戸・阪神間において、舞台化された菊池寛の作品がどのように上演され、また、それがどのように神戸の人々に受容され、評価されたかを、「神戸附録」という地方版の紙面から考察してきた。新しいことを積極的に評価していこうとする紙面と、それに参加する読者とが、神戸の劇場の特性を生み出してきたように思う。

菊池寛の作品は、舞台作品と共に映画作品としても、神戸で紹介されている。神戸での菊池寛作品は、一九二二年八月一日を封切初日として松竹製作の「火華」<sup>21</sup>が菊水館で上映されたのが始めである。「火華」は菊池寛作品の初の映画化作品でもある。

一九二四年二月七日に二葉館で封切られた<sup>22</sup>「時勢は移る」<sup>23</sup>は、製作が帝国キネマであり、兵庫県の芦屋撮影所が事務所となった。松竹劇場で「藤十郎の恋」が上演されていた同じ時に、二葉館で「時勢は移る」が上映されていたことになる。

一九二五年二月五日には、菊池寛作品三番目の映画化作品「恩讐の彼方に」が「神戸附録」に「映画界」の動向として紹介された。製作は、兵庫県の西宮市甲陽園と京都府の等持院に撮影所を持つ東亜キネマである。「恩讐の彼方に」は直木三十五が脚色し、牧野省三監督で甲陽園撮影所でも撮影された。

関東大震災以後、映画撮影の多くが関西で行われたため、菊池寛原作の映画化作品は、神戸

でも上映の機会を広げていく。今回は、一九二〇年前半の考察を行ったが、一九二〇年代後半については、稿を改めて考察したい<sup>24</sup>。

<sup>21</sup> 17日まで、上映された。菊水館は初日に、「神戸附録」紙面に広告を出している。  
「火華」原作は、「大阪毎日新聞」「東京日日新聞」（一九二二年三月二日～八月二三日）に連載されている。

<sup>22</sup> 二葉館広告（「神戸附録」一九二四年二月七日）

<sup>23</sup> 原作初出は、「中央公論」（一九二二年一月）である。

<sup>24</sup> 一九二六・一九二七年については、拙稿「菊池寛と一九二〇年代の神戸 一九二六・一九二七年の「大阪朝日新聞 神戸版」を資料として」（『文藝 もず』菊池寛記念館、二〇一七年六月）を、参照されたい。

本研究は JSPS 科研費 JP 15K02281 の助成を受けたものです。